

振武学校の日本語教材

吉岡 英幸

キーワード

振武学校・文法学習項目・トピック・『日本語会話教程』・『日本言文課本』

1. はじめに

私立振武学校は1903年（明治36）、軍人を志す中国人留学生を対象とする予備教育機関として、牛込区市谷河田町33番地の陸軍省付属地に設立された。それまで陸軍軍人を目指す留学生は成城学校に入学していたが、9名の私費留学生の保証問題で紛争が起こった結果、日本政府と中国公使との協定により、新たに留学生を受け入れる学校を作ることになった。これが振武学校であり、成城学校から中国人留学生を移すと同時に、中国各省から18歳～22歳の若者を毎年100名派遣し、入学させることとなった。学校には寄宿舎を設け、厳格な規律のもとに集団生活を送った。1903年12月の留学生の在籍者は、官費生35名、私費生38名で計73名であった¹⁾。卒業生は、1904年に49名、1905年に121名、1906年に202名、以後1914年（大正3）の閉校まで続き、中国軍隊の枢要な地位についた人物の9割はこの学校の卒業生であったという²⁾。

本稿は、筆者がこれまでに調査した振武学校の日本語教材の文法学習項目やトピックを中心に見た内容・構成の特徴と、1906年（明治39）に行われた大幅な改定の基本方針を明らかにすることが目的である。明治期の日本語教材については、吉岡2000Aで約100種の日本語教材を分析し、文典型教材、語法型教材、読解教材、会話教材、文字教材の五つに分類できること、そのうち文型的な学習項目を中心に構成されている語法型教材が3割を占めることを明らかにした。また、吉岡1999では、振武学校編『日本言文課本首巻』を含む6種類の教科書の文法学習項目を調査し、現代の初級教科書の文法学習項目をもとにして決められた日本語能力試験シラバスの4級、3級の文法項目の中で、少ないもので23%、多いもので78%の重なりがあることを述べた。こうした明治期の日本語教材の中で、振武学校の日本語教材がどのような位置を占めるのかということについての検討も行う。

2. 振武学校の日本語教育

振武学校は、その学校規則の主旨によると、将来陸軍軍人になる中国人留学生に、陸軍士官学校あるいは陸軍戸山学校入学のための予備教育を行うものとするとしている。修業年限は1年3ヶ月（後3年に変更）とし、それぞれ5ヶ月ずつの3学期制をとった。学科課程表の日本語科目の部分は次のようになっていた。

科目：日本語、日本文

[1学期] 前半3ヶ月－18時間、後半2ヶ月－16時間

片仮名、清音、濁音、拗音、促音等より始め、発音を正し、次いで単語、単句等すべて言文を一致せしめ、言語を練習し、なお進みては漢字交じりの談話文を教え、つとめて標準語を学ばしむ。ただこの学期に於いては語と文とを分かつたず。時々言語を実施に 응용せしめんがため会話、演説などをなさしむべし。以下各学期とも同じ。

[2学期] 前半2ヶ月－14時間、後半3ヶ月－12時間

前学期に続いてなおも談話体の文を設け、勉めて言語を練習せしめ、順次文章体を教え、明らかにその意義を了解せしめんことを期す。

[3学期] 12時間

前学期に続いて、やや高尚なる普通文を教え、また文典の初歩を授け、あるいは漢文を本邦文に訳せしめ、もって日本語文に通曉せしめんことを期す。

となっている³⁾。

対象者は全員漢字系の中国人であること、規律に厳しい軍人であり、進学及び軍人教育を受けるためには日本語の上達が不可欠であるという動機付けが明確であることなどが、日本語教育の点から見た長所といえよう。ただ、予備教育であるため日本語だけでなく、歴史、地理、算術、代数、幾何、三角法、物理、化学、生理衛生、図画、体操、典礼教範などの教科も履修しなければならず、かなりの時間をそれにさかななければならないという制約もあった。

3. 振武学校の日本語教材

筆者がこれまで調査した結果、判明した振武学校発行の日本語教材は、以下のとおりである。

- A－1. 語文教程巻1 (1904年－明治37－11月25日発行、104P)
- －2. 語文教程巻2 (1904年－明治37－11月25日発行、74P)
- －3. 語文教程巻3 (1904年－明治37－11月25日発行、78P)
- －4. 語文教程巻4 (1904年－明治37－11月25日発行、104P)
- －5. 語文教程巻5 (1904年－明治37－11月25日発行、96P)
- －6. 語文教程巻6 (1904年－明治37－11月25日発行、118P)
- －7. 語文教程巻7 (1904年－明治37－11月25日発行、152P)
- B－日本語会話教程 (1906年－明治39－2月1日発行、134P)
- C－日本語法教程 (1906年－明治39－3月発行)
- D－1. 日本言文課本首巻 (1906年－明治39－4月21日発行、102P)
- －2. 日本言文課本巻1 (1906年－明治39－4月2日発行、80P)
- －3. 日本言文課本巻2 (1906年－明治39－4月2日発行、86P)
- －4. 日本言文課本巻3 (1906年－明治39－4月2日発行、94P)
- －5. 日本言文課本巻4 (1906年－明治39－4月2日発行、104P)
- －6. 漢訳日本言文課本全 (1906年－明治39－6月10日、巻1－58P、巻2－49P、巻3－64P、巻4－59P)

その他、日本語の教材ではないが、振武学校編纂の一般教科の教科書として

E-1. 算術教程 (1909年-明治42-4月1日発行、219P)

-2. 博物教程 (1909年-明治42-2月1日発行、第1編植物50P、第2編動物53P、第3編生理衛生64P、第4編鉱物41P)

がある。

Aの『語文教程』は、巻1が50課、巻2が77課、巻3が41課、巻4が69課、巻5が40課、巻6が30課、巻7が32課、計339課の構成となっている。1903年(明治36)秋の振武学校開設にともない急遽作成使用した教材を印刷したものであろうが、明治期これだけまとめた日本語教材は見当たらない。4巻の初めにある書き言葉による文章語の本文などから学習課程をもとに推測すると、1学期が巻1と2、2学期が巻3と4、3学期が巻5・6・7の使用を想定して作成されたものと思われるが、授業時数から見て内容が多く、特に3学期など授業で消化するのは困難な量であろう。その後、大幅な改定作業が行われ、会話指導のために編纂されたものがBの『日本語会話教程』であり、Aの中から適切なものはそのまま、または1部手を入れるなどして残し、それ以外に足りないものを新たに付け加えるなどして、書名も変え全5巻計200課に編纂したものがDの1～5の『日本言文課本』である。このうち首巻は『語文教程』巻1と表記の誤りを含む2・3の語例の異同を除けば本文は同じ内容である。『日本言文課本』の巻1～巻4に採られた『語文教程』の巻と課の数及び新たに追加された課の数は次の通りである。

語文教程 日本言文課本	巻1 (50課)	巻2 (77課)	巻3 (41課)	巻4 (69課)	巻5 (40課)	巻6 (30課)	巻7 (32課)	新
首巻(50課)	50							
巻1(56課)		33	20	1				2
巻2(36課)				27	5			4
巻3(30課)			1		12	14	1	2
巻4(28課)					3	6	11	8

『日本言文課本』巻1の全56課は、『語文教程』の巻2から33課、巻3から20課、巻4から1課、新たに加えたもの2課で構成されていて、『語文教程』の巻2と3を中心に編纂されている。同様に巻2は巻4が、巻3は巻5と6が、巻4は巻6と7を中心に編纂されている。同様に巻2は巻4が、巻3は巻5と6が、巻4は巻6と7を中心に編纂されていることを表す。『日本言文課本巻4』の新しく加えられた8つの課は、第2、3、4、8、17、22、23、26課に配されており、内容的に難度の高い教材の必要性から加えられたものではない。『語文教程』を使用してみて、学習期間に比べ内容が多すぎて消化できなかったため、到達度のレベルは変えずに精選しスリムにするというのが大きな改定方針であったことがわかる。

Cは植木直一郎の編纂になるものであるが、未見であり詳細は不明である⁴⁾。文法項目理解のための教材であろう。Dの6は『日本言文課本』全5巻の本文の中国語訳を1冊にまとめたものであり、自習用に編纂されたものである。

4. 『日本語会話教程』と『日本言文課本』の内容・構成

『日本語会話教程』は、第1編言語部、第2編名詞部、第3編問答部、第4編会話部の四つに分かれている。1編は37課で構成されており、1課が人称代名詞と助詞、2課が「こそあど」、3課が「なさい」、4課が「下さい」というように、課の文法学習項目が明確に立てられ、ほとんどの課にそれが明示され簡単な中国語での説明を付して、本文にその項目の例をあげている。2編は、題はついていないが軍隊用語、自然、地形、時、職業など20の項目に分けてそれぞれの単語があげられている。3編は、1「あなた此頃はお忙しゅうございますか」「格別忙しくはありません」、2「あなたは私の所へお遊びにお出でなさい」「はい、後日伺いましょう」というような2発話から成る104の「問答」で構成されている。4編は「あなたのお名前は何と申しますか」「私は李方正と申します」「何時こちらへお出でなさいましたか」「本月の初めに参りました」というような場面などによる4発話以上のやりとりの91の「会話」で構成されている。現代の多くの初級教科書が課ごとに文法学習項目と語彙を中心に本文の対話と文型練習などで構成しているものを、1編は基本文型、2編が語彙、3編と4編は挨拶や場面に即した表現という構成にしているのである。この『日本語会話教程』の内容を文法学習項目の視点から分析しその特徴を探ってみる。調査の対象は名詞語彙を集めた2編を除く1、3、4編とする。この教材と並行して使用されたと思われる『日本言文課本首巻』のそれも比較のため記す。具体的な方法としては現代の日本語教材の初級文法学習項目を基に決められた日本語能力試験4級、3級の「文法」の各項目がどのくらい採られているかを見ていく⁵⁾。受給表現「あげる、もらう、くれる」のように複数の語彙が項目となっている場合は、一つでも出てくればその初出の課を記した。例えば『日本語会話教程』の1編の16課に出てくるものは1-16のように示した。編纂者が文型として意識して例文に入れたかどうか疑わしいものもあるが、その例文が文法項目として判断できるものはすべて採った。

1) 4級

A. 文法事項

A-I 文型、活用等

文法項目	会話	書文	文法項目	会話	書文
「は」+疑問詞	1-16	24	疑問詞+「か」		36
形容詞の現在・過去・否定	1-11	24	形容詞のテ形 Aくて	4-80	
形容詞の連用形+動詞	1-36		形容詞+名詞 A+N	1-08	36
形容詞+の Aの	1-34		形容動詞 現在・過去・否定	1-11	
形容動詞のテ形 ANで	4-15		形容動詞の連用形+動詞		
形容動詞+名詞 ANを+N	1-08		形容動詞+の ANなの		
存在文 NにNがある/いる	1-15	37	存在文 NにNがQある/いる	1-17	43
所在文 NはNにある/いる	1-16	38	動詞 現在・過去・否定形	1-11	16
動詞の自他 NがV/NをV			動詞のテ形 Vて	1-10	21
動詞のテアル形 Vである		37	動詞のテイル形 Vている	1-10	21
動詞のナイテ形 Vないで			名詞述語文の現在・過去・否定	1-15	34
名詞述語文のテ形 Nで	3-82		名詞+の+名詞 NのN	1-01	34

名詞+のだ 私のだ	4-40		連体修飾+名詞 買った本	1-16	
-----------	------	--	--------------	------	--

A-Ⅱ 助詞、指示語、疑問詞等

疑問詞 何	1-16	24	疑問詞 だれ/どなた	1-01	34
疑問詞 いつ	1-21	34	疑問詞 いくつ	3-82	
疑問詞 いくら	1-17		疑問詞 どこ	1-02	37
疑問詞 とれ	1-02	36	疑問詞 どう	3-43	
疑問詞 どんな			疑問詞 どのぐらい	3-30	
疑問詞 なぜ/どうして	3-26		疑問詞+か 何か	3-79	
疑問詞+も+否定 何も	1-15		これ、それ、あれ	1-02	36
この、その、あの	1-02	36	ここ、そこ、あそこ	1-02	37
こちら、そちら、あちら	1-02	39	が 友達が来た(主語)	1-09	20
を 私はパンを食べる(目的語)	1-03	22	を 家を出る(起点等+を)		
に ここに本がある(場所)	1-15	37	に バスに乗る(到達点)	1-11	25
に 7時に起きる(時間)	3-49		に 本を買いに行く(目的)	1-12	
に 1日に3回行く(回数)	3-29		で 公園で野球をする(場所)	3-36	
で バスで行く(手段方法)	3-67		で 木で机を作る(材料)	3-20	
で 病気で学校を休む(理由)	1-36		で 全部で100円(数量)	3-09	43
へ 東京へ行く(方向)	1-03	25	と 本とノート	1-01	46
と 妹と(いっしょに)	4-08		と 友達と会う(動作の相手)		
から、まで 家から駅まで(場所)	1-21	26	から、まで 1時から3時まで(時間)	1-21	
を 切手やはがき			は 私は学生です	1-17	24
は テニスは外です(目的語)			は 酒は飲まない(否定と)		27
は 私は行くが、兄は～(対比)	1-02		も 私は行く。兄も行く	1-01	32
も 本もノートもある	1-01		格助詞+は/も には、へも	1-34	
か 本かノート	4-32		か 行くか行かないか		
など 本やノートなど			ぐらい 30人ぐらい		
だけ 果物だけ食べた	4-16		しか 果物しか食べない		
で 明起きて散歩した(単純修飾)	1-34		で 本を見て読む(目的、方法)		
で 風邪をひいて休む(理由)	1-36		が すいませんが本を	3-92	
か これはあなたの本ですか	1-16	24	か 先生ですか、学生ですか	4-43	
ね 今日はいい天気ですね	1-25		よ その本はいいですよ	4-68	
わ 私もいくわ			中 1年中暑い		
たち/ども/方 私たち	1-01	34	あまり～ない あまり見ない	4-47	
1～100/一つ(数)	1-06	42	北/南/本等(助数詞)	1-06	43
～月/～日/～曜日	1-06	48	～時～分(時刻)	1-06	50
～時間/～分間(時間)					

B. 表現意図等

依頼 Nを下さい	1-04	30	依頼 ～て下さい	1-06	30
依頼 ～ないで下さい			依頼 Nを/Vで下さいませんか	3-45	
勧誘 Vしましょう	1-12		勧誘 Vませんか	4-74	
希望 Nがほしい			希望 Vたい	1-27	
逆説 ～が	1-24		同時 V時	1-17	

同時 Vながら			前後 Vでから	1-23	
前後 Vた後(で)			前後 V前(に)		
数量 でしょう/だろう	1-13	32	並立 VたりVたり	4-73	
変化 Aく/ANに/になる	1-30	26	変化 Aく/AN/Nにする	3-13	
変化 もう+肯定/否定	1-17		変化 まだ+肯定/否定	1-17	32
名称の導入 ~というN	1-17		理由 ~から	1-20	

2) 3級

A. 文法事項

A-I 文型、活用

文法項目	会話	書文	文法項目	会話	書文
受身 V(ら)れる	1-3		敬語 おVになる	4-46	
敬語 V(ら)れる	3-25		敬語 おN	1-23	
敬語 おVする			敬語 おVいたす	4-77	
敬語 (お)Aございます	1-17		敬語 AN/Nでございます	1-17	34
使役 V(さ)せる	1-36		使役+受身 V(さ)せられる		
~ずに Vず(に)	4-69		文の名詞化 ~の	1-16	
文の名詞化 ~こと			文の名詞化 ~ということ		
補助動詞 V ていく/くる	1-04		補助動詞 Vてみる	3-57	46
補助動詞 V てしまう	1-17		補助動詞 Vておく		

A-II 助詞、指示語等

こんな、そんな、あんな	2-74		こう、そう、ああ		
縮約形 ~ちゃ			までに 9時までに		
も 50万円も持っている			ばかり テレビばかり見て	1-34	
でも お茶でも飲もう(指示)	4-79		疑問詞+でも 何でも	4-74	
とか 本とかノートとか			し 寝もいいし休も丈夫		
の いっしょに行くの			だい どうしたんだい		
かい いっしょに行くかい			Aさ/ANさ 暑さ	4-82	
らしい 男らしい人			Aが絡/ANが絡 暑が絡		

B. 表現意図

意志 V(よ)うと思う	4-69		意志 ~つもりだ	1-17	
意志 V(よ)うとする			意志 Vことにする		
意志 Nにする			依頼 おVください	1-17	
依頼 (さ)せてください			引用 ~と言う	2-52	
開始 Vはじめる			開始 Vだす		
過度 Vすぎる	3-91		可能 Vことができる		
可能 V(ら)れる	1-36		勧告 ~ほうがいい		
希望 Vたがる	4-47		義務 ~なければならぬ	1-19	
逆説 ~のに			許可 ~て(も)いい	3-83	
禁止 ~てはいけぬ	1-18		禁止 ~な		
推察 Vたことがある	3-33		非難 V蹴る		
終了 V終わる			授与 あげる/もらう/くれる	4-19	28

受給 ～てあげる／もらう／くれる	1-17	30	受給 さしあげる／いただく／下さる	1-17	
受給 ～てさしあげる／いただく／下さる	3-72		条件 ～ば	1-30	
条件 ～たら			条件 ～なら	4-81	
条件 ～と			状態放置 ～まま		
離接 ～ても／でも	1-29		疑問詞+ても／でも		
数量 ～と思う	1-13		数量 ～らしい		
数量 ～かもしれない	3-87		数量 ～はずだ／はずがない	3-96	
数量 ～ようだ			伝聞 ～そうだ	1-26	
算易 Vやすい			算易 Vにくい	1-36	
比較 ～は～より	1-32	36	比較 ～と～とどちら／ほう	3-21	
比較 ～ほど～ない			比較 ～よう	4-15	
不必要 ～なくてもいい			方法 ～かた		
命令 V命令形	4-88		命令 Vなさい	1-03	
目的 Vため(に)	3-67		状態 ～そう	1-26	
理由 ～ので			理由 ～ため(に)	3-27	
～は～が 私は大が好きだ	4-02		～は～が 彼は鼻が長い		
～がする 者／においがする			V ことがある 休むこと～	1-33	
Vことになる 習すことになる	4-91		～のだ どこへ行ったのか	3-38	
疑問詞+～か だれが来たか			～かどうか 来たかどうか		
～ように言う			～ようにする		
～ようになる			Vところだ 行くところだ		

上記の文法学習項目をまとめると次の表ようになる。

	4級	3級	計	A I	A II	小計	B
全項目数	115	100	215	44	83	127	88
会 話	91(79%)	53(53%)	144(67%)	33(75%)	59(71%)	92(72%)	52(59%)
書 文	45(39%)	5(5%)	50(23%)	16(36%)	24(31%)	42(33%)	8(9%)

『日本語会話教程』に採られている初級文法項目が67%というのは、決して少ない数字ではない。それ以前では1904年（明治37）とその翌年に壺と武がそれぞれ刊行された金井保三著『日語指南』の重なり率が72%という例があるが⁶⁾、これはむしろ例外的な存在であり、1900年（明治33）の『台湾適用会話入門』の36%、1902年（明治35）の『東語初階』の47%などと比べれば、明治期の教材としては広く基本的文法事項を織り込んでいると見るべきである。3級の項目より4級のほうが、A IIよりA Iが多く、より基本的項目を重視していることも編纂者の基本文型などに対する認識をうかがうことができる。

『日本言文課本』は読解を中心に作文や文法などを指導することを目的に編纂されたものである。首巻には、冒頭に中国語で記された「日本言文課本教授法」があり、この教材を使用するときの簡単な教え方が記してある。内容は、1課から15課までが仮名表記及び発音練習を習得するためのもの。16課から19課までは存在文。20、21課は自動詞述語文。22、23課は他動詞述語文というように学習項目が明確であり、導入期の基本的単語と構文を中心に構成されている。本文は漢字と片仮名で表記され、中国語訳がついている。巻1からは日本語の本文のみで構成されており、各課の文法学習項目は明確ではない。かなり恣意的に語彙などの難易度を判断し、課ごとに配列したものと思われる。首巻は全体的に

文法項目数が少ないが、これは基本的文型を習得させることより、読解教材として書き言葉の種々の文体に習熟させるという到達目標の最初の段階として、片仮名や平仮名とその正しい発音を習得し、日本語の構文を理解させ、短い文から少しずつ長い文に慣れさせるという編纂方針をとったためであると考えられる。『日本語会話教程』のBの表現意図が約6割であるのに対し、『日本言文課本』のそれは1割にも満たないことを考えても、前者が初級段階での会話指導を、後者が読解や文法、作文などを指導するという目的で編纂された教材であることを裏付けていると言えよう。表記の面では、首巻が漢字交じりの片仮名表記、巻1は奇数課が片仮名表記、偶数課が平仮名表記で、巻2からは平仮名表記となっている。課によって片仮名と平仮名表記を分ける方法は、金井保三著『日語指南』などにも見られ、双方の表記に慣れさせるための工夫だと思われるが、この方法は『語文教程』の巻2と巻3でも行っており、それを巻1に集中徹底させたことになる。巻2から書き言葉の文体に慣れることが要求される。首巻冒頭の「教授法」によると、文法は巻1の半ばから教える。作文は巻4から始めるが、最初は中国語の文を日本語に訳させ、学生の実力によっては自由に作文を書かせるか、話し言葉を書き言葉に直させるなどの練習をさせるという。

『日本言文課本』の巻1から巻4までの本文全体を見渡したときの特徴は、軍や軍人、戦争に関したトピックを本文に多く選んでいることである。それらを題に選んだものを拾うと、巻1では「兵士」(5課)、巻2では「兵役」(5課)、「軍紀」(6課)、「各国の軍備」(23課)、「軍艦」(24課)、巻3では「日本の軍港」(5課)、「軍艦の種類」(6課)、「水雷の話」(9課)、「軍艦内の生活」(10課)、巻4では「日本の徴兵制度」(4課)、「陸軍礼式」(6課)、「連隊旗」(7課)、「戦争の説」(9課)、「赤十字」(10課)、「前出師表」(13課)、「トラファルガーの海戦」(14、15、16課)、「英国海軍の歌」(17課)、「レオニダスの忠烈」(21課)、「ナルバの戦」(26課)、「軍人に下し賜りたる勅諭」(27課)、「軍人読法」(28課)などがある。その他あるべき軍人精神に関するものとして「海行かば、皇御国」(巻3-11課)、「精神教育」(巻4-6課)、「あしびき」(巻4-8課)、「命をすてて」(巻4-22課)などがあり、軍人としての訓練を受ける上で必要な語彙や文型など言語的事項だけでなく、天皇制における社会組織や軍人精神のあり方などの知識や心がまえを習得させるというのが編纂方針であったことをうかがうことができる。

5. まとめ

振武学校では、陸軍士官学校などに進学し軍人として必要な教育を受ける中国人を対象にした予備教育としての日本語教育が要求され、主に読解のための教材として『語文教程』が作成された。全7巻、計339課という大規模な日本語教材は、それ以前には見当たらない。そして、大幅な改定作業が行われ、2年後に巻1はほぼ同じ内容で首巻とし、巻2から巻7までは精選され1部新たに加えるなどして4巻にまとめ、『日本言文課本』全5巻計200課が編纂された。到達度は変えないで、学習時間に合わせ全体をスリム化するというのが改定の方針であったと考えられる。また、内容的な特徴としては、軍や軍人、あるいは日本の天皇制におけるあるべき軍人精神などをトピックにした本文が多く、特に巻4は軍人のための専門教材として整った体裁を備えている。『語文教程』も『日本言文課本』

も最初の巻は構造シラバスではあるが、文型のバリエーションより仮名表記やその発音の習得と、日本語の基本的構文を理解して読解技能の基礎を習得させることを基本方針とし、それ以降の巻は話題シラバスで作成されたと言える。入門期から超上級レベルまで一貫した方針で作成された軍人のためのいわゆる専門日本語用の教材は、明治期のみならず日本語教育史を通じて極めてユニークな存在である。『日本言文課本』とほぼ同時に編纂された『日本語会話教程』は、文型文法、語彙、問答・会話に分けてそれぞれ用例をあげるという構成になっており、全体に配された文法学習項目は現代の初級文法学習項目と67%が重なっている。教材編纂から今日まで約100年の推移は、日本語教材に入れるべき日常語にも変化を及ぼしていることを考慮すれば、この数字は決して少ないとは言えない。主に読解のための『日本言文課本』、場面や表現意図による種々の表現を指導するための『日本語会話教程』と、役割分担を行うことが全体の編纂方針であった。振武学校の日本語教師や教材作成にかかわった者で現在わかっているのは、植木直一郎だけであるが、教材編纂者は基本的文法学習項目に対する認識があり、その習得が日本語教育を行う上で重要であると考えていたと見て間違いあるまい。明治期、今日日本語教育で使用されている文型・文法事項が既に認識され、これを中心にすえた構造シラバスの教材が編纂されており、振武学校の初級レベル用の教材もその一つであったといえることができるのである。

付記 本文中の引用文献の旧字体や旧仮名遣いなどの表記に関しては、原則として現代表記の基準にのっとり書き改めた。

注

- 1) 四街道市編纂委員会編 [1981]『四街道市史』p.110
- 2) さねとうけいしゅう [1981]『増補中国人日本留学史』p.70, p.534
- 3) 東京都公文書館625.D5.04「私立各種学校設置認可の件」M36年8月27日参照。
- 4) 植木博士還暦記念祝賀会 [1938]『植木博士還暦記念国史学論集』。年譜に1904年4月振武学校教授嘱託、1905年7月『日本語文教程』（2冊）編纂、1906年3月『日本語法教程』（1冊）編纂とある。この『日本語文教程』が『語文教程』のうちの2巻かどうかは不明。1911年11月22日振武学校教授嘱託を解かれたという。
- 5) 国際交流基金、日本国際教育協会編 [1994]『日本語能力試験出題基準』による。
- 6) 吉岡英幸 [2001]「金井保三著『日語指南』の文法学習項目」『講座日本語教育』第37分冊p.14～p.26参照。

参考文献

- 1) 松本亀次郎 [1931]「中華留学生教育小史」『中華五十日游記』
- 2) 吉岡英幸 [2000A]「明治期の日本語教材」『日本語教育史論考－木村宗男先生米寿記念論集』凡人社
- 3) 吉岡英幸 [2000B]「明治期の日本語会話教材」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13号
- 4) 吉岡英幸 [1999]「明治期の日本語教科書の「文型」」『日本語研究と日本語教育』明治書院